

まちづくり新聞

上助漕

小正月行事で豊穰祈願 集落で伝える、だんごの木飾り、どんど焼き

神納東の伝説 姫塚（里本庄）

城山のお堂から、低いつぶやくような誂経しんぎょうの声
が流れてくるのを聞いた時、太郎作はつと足を止
めて小首をかしげました。

（誰かいらあんだらうか？）

と不思議に思ったからです。それもそのはず
で、このお堂は本庄ほんじょう繁長の義妹の姫御前ひめごぜんをしの
んで、村人たちが建てたもので、人が住んでいる
はずがないのです。

太郎作は、そつと足音あしなを忍しのばせてお堂へ近づい
てゆきました。そして、戸の透すき間からのぞいて
みると、中では一人の尼あまさんが線香せんこうをたき経とを唱
えながら、何なにごとか一心に拝をんでいるところでした。

「……？」

太郎作は、また首をかしげました。中は薄暗く
てよくはわかりませんが、何となくその尼さんの
姿には見覚えがあるような気がするのです。太郎
作は、しきりに考えましたが、なかなか思い出せ
ません。

そうこうするうちに、外の物音に気がついたの
か、ふと誂経しんぎょうが止やみ、あわてて太郎作が階段を飛
び降りようとしたのとほとんど同時にお堂の戸
が開きました。しかも、

▼裏面へ



1月13日、上助漕集落の
だんごの木飾り、どんど焼き
が行われました。

集落役員の皆さん、15日
集会の皆さん、PTAの皆さん
が協力して準備をします。

だんご飾りを終え、どんど
に火が入れられると勢いよ
く燃え上がり、竹の破裂する
音と子ども達の元気な声が
響いていました。

まちづくり掲示板

山屋集落（報告）

国道290号と市道山屋前谷
線の交差点に押しボタン式の信
号機がつけました。



12月27日、山屋集落の渡り初め

※青信号でも左右確認して
渡りましょう。

上助漕集落（報告）

集落区長が交替しました。

（新）中村喜三男さん

（旧）中村悦夫さん

七湊集落（報告）

集落区長が交替しました。

（新）天井 丈さん

（旧）平山俊次さん

「まあ、太郎作さんではありませんか」

と、優しい声で呼ばれたから、太郎作はびっくりのしつぱなしで、しばらくは馬鹿みたいに口を開けて尼さまを見つめているばかりでした。が、やがて太郎作の顔に変化が現れたと思うと、それは見る見る喜びに満ちた表情に変わってゆきました。

「ひ、姫御前：：：さま、ではございませぬか！」

太郎作は、まさか幽霊ではあるまいなといった表情で、尼さんの姿を上から下までながめ回していましたが、そのうちに自分の非礼さに気がついたのか、ぱつと階段から降りると地べたにひれ伏しました。

「あらまあ、太郎作さん。私はもう姫御前ではございません。ごらんとおり出家してただの尼ですわ」

尼さんはそう言うと、自分も階段を降りて太郎作の前にすわり、

「里本庄が恋しくて、こうして帰ってまいりました。たつた今、亡き母の供養を済ませたとこ

ろですが、皆さまのご迷惑にならなければ、ずっとここにおいてはいただけませんでしょうか」と、深々と太郎作に頭を下げたのです。太郎作はもう嬉しいやら恥ずかしいやらで口もきけず、刈

つてきたばかりの草を背負うのも忘れて、

庄屋様の家へとんで

ゆきました。



尼さんは、かつて少女時代をこの村のこの場所

にあった館で過ごしました。村上の本庄城主で義兄でもある本庄繁長が、里本庄に根小屋を作り、母と彼女をここへ住ませたのです。彼女は「姫御前」と呼ばれかすかされていましたが、威張ったところが少しもなく、家来も村人たちも同じ人間としてつき合っておりまして。

このため、村人たちは、姫御前が年ごろになり、上杉謙信の家来の山本寺定景に嫁いだ時は、村人たちは笑顔で見送りながらも、みな心の中では泣いていました。

姫御前が嫁にいつて間もなく、義兄の繁長が謙信にむほんを起すという事件がありました。このため、謙信は繁長を攻め、ついでに里本庄の根小屋まで焼き払ってしまったのです。それ以来、謙信は繁長の勝手を許さず、里本庄は火が消えたように寂しい村になりました。でも村人たちは、美しく優しい姫御前のことが忘れられず、今はなき館の跡に小さなお堂を建てて、姫御前の幸福をお祈りしていたのです。

ところが、義兄のむほんは、皮肉にも姫御前をまた里本庄に呼び戻す結果ともなりました。姫御前は、夫の定景が謙信の信望厚い部将であるために、義兄のむほんで迷惑がかかるのではないかと気づかない、二人の子供を置いて出家してしまつたのです。そして、方々の尼寺で修業を積みながら、とうとう里本庄まで来てしまいました。姫御前には、やはり母や村人たちと楽しく過ごしたこの土地が忘れられなかつたのでしょうか。

さて、太郎作から話を聞いた庄屋様は、大喜びでさつそく村人たちを集めました。

「姫御前さまをお招きして、盛大にお迎えしようじゃねえか」

というのです。でも、これは姫御前が志だけを受けて遠慮しました。また、お堂ももつと大きな新しいものに作り替えたいという申し出にも、「出家の身には、ぜいたくはなじみません。雨露をしのげる場所があるだけでも、もつたいううございませす」

と、決して受けようとはしませんでした。

尼となつた姫御前の暮らしぶりは、まことに潔く、清貧の名に恥じないものでした。村人のつき合いは以前にも増して厚く、子供たちの良き遊び相手でもありました。そうして、毎朝夕、死んだ母のめいふくを祈り、山本寺へ残してきた二人の子供や村人の幸福をお祈りしていたそうです。

姫御前が死んだ時、村人たちはその亡きがらと共に、彼女が生前愛用した茶碗なども埋めて、悲しい別れを告げました。村人は、ここを「姫塚」と呼び、自分たちの宝のようにしてあがめてきました。が、あまりに大切にされたためでしょうか。いつのころからか、この塚の下には貴重な財宝が埋めてあつて、塚に手をふれるとあたりがあるなどといわれるようになりました。そのため、塚ばかりかお堂にまで近寄らなかつたので、お堂は荒れはててしまい、自然にこわれてしまつたということです。(終) (出典…神林村史 村の伝説)

ご意見・ご感想・お問い合わせは、

■村上市神林支所
地域振興課自治振興室

■電話・告知端末
0254-66-6122

■自治振興室メール

k.shinko-chiiki@city.murakami.lg.jp

《まちづくり雑記》

今回は思い切つて、里本庄に伝わる姫塚伝説を掲載しました。長文で文字が小さくなつてしまいました。が、お許しください。

まちづくりでは、よく地域の宝を探そうとか、個性が重要だと言われます。

地域の宝や個性は簡単に作れるものではありません。長年にわたつて培ってきた、何気ないものが大切なお宝だったりします。

地域の個性(郷土愛)を活かし、新しい感性も育てながら神納東のまちづくりを進めていけたらと思ひます。
神納東担当 東